

遠方の母

小川未明

青空文庫

しょう

正ちゃんは、三つになったときに、はじめて自分には、お母さ

んのないことを知りました。それは、どんなにさびしかったであ

りましょう。みんなに、お母さんがあるのに、どうして、自分

ばかり、お母さんがないのか？ それで、正ちゃんは、女中

の脊中におぶわれながら、

「お母ちゃん、……お母ちゃん。」と、小さな掌で、女中の

肩のあたりをたたきながら、呼びました。

それは、「私には、ほかの子供たちのように、やさしいお母さ

んがないの？」と、たずねていることがよくわかりましたので、

女中は、

「坊ちゃんのお母^{かあ}さんは、ののさまになってしまわれましたのですよ。」といって、青^{あお}い空^{そら}の方^{ほう}を指^さしたのであります。

しかし、ののさまということも、また、ののさまになれば、空^{そら}へ上^{のぼ}つてしまわなければならぬということも、まだ正^{しょう}ちゃんには、わかりませんでした。いろいろとかたことまじりに、女^{じよ}中^{ちゆう}に

問^といましたので、彼女^{かのじよ}は、

「坊^{ぼっ}ちゃんのお母^{かあ}さんは、遠^{とお}いところへいつてしまわれたのですよ。」と、哀^{あわ}れな子^こ供^{ども}に、説^といて聞^きかせなければならなかったのです。

彼女^{かのじよ}には、どうしても、このとき、死^しんでしまったというこ
とが、あまりに、子^こ供^{ども}に對^{たい}して、いじらしくていえなかったので

した。

しょう 正ちゃんは、お母^{かあ}さんが、遠^{とお}いところへいったと聞^きくと、よく
じょちゆう はなし 女 中 の話がわかりました。いつ、その遠^{とお}いところから、帰^{かえ}つ
てくるかということも、また、その遠^{とお}いところというのは、どこ
だろうということも知らなかつたけれど、ただ、ぼんやりと、遠^{とお}
いところへいったのだということだけがわかりました。

しょう 正ちゃんは、自分^{じぶん}をよくかわいがってくれる 女 中^{じょちゆう} の脊^せ中^{なかつ}に
いて、不自由^{ふじゆう}はしなかつたけれど、自分^{じぶん}にはほかの子供^{こども}のように、
お母^{かあ}さんがいないのだと思^{おも}つたときは、さびしそうにみえました。
そして、どんなことを、小^{ちい}さな頭^{あたま}の中^{なか}で思^{おも}っているのか、

「お母^{かあ}ちゃん、……お母^{かあ}ちゃん。」といつて、小^{ちい}さな掌^{てのひら}で、女^{じょち}

中の肩のあたりをたたいたのであります。

ある日のこと、もう、夏でありましたから、女中は手にう

ちわを持っていました。そのうちわは、毎日のように、勝手も

とへご用を聞きにくる、出入りの商人が暑中伺いに持

つてきたのであつて、だれが描いたのかしれないが、若い女の人

が、晩方の町を歩いている絵が描いてありました。

女中は、なんということなく、また深い考えもなく、脊中

の正ちゃんに、うちわを見せて、

「坊ちゃんのお母さんは、ここにいられますよ。」といって、う

ちわの中の女の人を指さしたのでした。

正ちゃんは、じつと、その絵にみとれていましたが、

「お母^{かあ}ちゃん。」といって、急^{きゆう}に、かわいらしい手^てで、しっかりと
とうちわの柄^えをつかんでしまつて、放^{はな}しませんでした。

その絵^えの女^{おんな}の人の顔^{かお}は、あちらを向^むいてるので半^{はん}分^{ぶん}しか描^か
いてありません。けれど若^{わか}い、しとやかな、美^{うつく}しい姿^{すがた}をしていま
した。そして、墨^{すみ}絵^えで書^かかれた町^{まち}は、黒^{くろ}く浮^うき出^でて、町^{まち}の屋^や根^ねを
赤^{あか}く染^そめて、夕^{ゆう}焼^やけの空^{そら}が、もの悲^{かな}しく見^みえていたのです。

子供^{こども}の目^めに、その絵^えは、どんなふうに映^{うつ}つたでしょうか。それ
をだれも知^しる人^{ひと}はありません。しかし正^{しょう}ちゃんは、そのうちわを
持^もつと、じつとその絵^えに見^み入^いっていました。赤^{あか}い絵^えの具^ぐの色^{いろ}が、
水^{すい}晶^{しょう}のよう^{よう}に、清^{きよ}らかに澄^すんだ、正^{しょう}ちゃん^{ひとみな}の瞳^{ひとみ}の中^{なか}にうつる
のでありました。

「坊ちゃんぽっは、このうちわが、大好きだいすですね。」と、女中じょちゆうは、

笑わらいながらいいました。

正ちゃんしょうは、寝起ねおきのいい子こでありましたけれど、おりには、

ふきげんで、泣なくこともありました。そんなとき、彼女かのじょは、う

ちわを持もつてきて、

「お母ちゃんかあが、お母ちゃんかあが……。」「といいました。哀れあわな子こ

供どもは、ものいわない絵えに見入みって、泣なきやむのがつねでありまし

た。そして、小さな指ゆびで、うちわに描かかれた、女おんなの人ひとを指ゆびさして、

「お母ちゃんかあ、……お母ちゃんかあ。」と、かわいらしい声こえを出だして、

正ちゃんしょうはいつたのです。

絵えは、もとよりなんの言葉ことばもありませんでした。しかし、正しょうち

やんは、絵のお母さんが、笑ってでも見えるのか、ひとり、声をたて、自分で笑って、なぐさめられたのであります。

夏でありましたから、ちようどうちわの絵のように夕焼けのした景色が、町の中でも見られました。そのうちに、だんだん夏も終わりに近づいたのです。

暑さを忘れるようになると、だれでも、うちわを粗末にします。

たいていうちわというものは、その年だけしか使用しないからです。女中も、やはりその一人でありました。ある日のこと、

勝手もとで、しちりんなべに鍋をかけて煮物をしていましたが、その焼けた鍋を下ろすときに、正ちゃんの好きなうちわだという考えもなく、その上におろしました。そのために、うちわの絵の描い

である表が、赤黒く焦げてしまったのです。そして、正ちゃんのお母さんも焦げてしまいました。

「お母ちゃん、……お母ちゃん。」と、正ちゃんがいったときに、女中は、その焦げたうちわを取り上げて、いまさら、自分の無分別をば、深く心に恥じながら、これを正ちゃんに渡しますと、正ちゃんは、おどろいて、そのうちわを見つめていましたが、ばたりと手から落として、急に、悲しくなつて泣き出しました。

「お母ちゃん！ お母ちゃん！」

なんといつても、呼びつづけてやみませんでした。女中は、困ってしまった。しかし、自分が悪いのだと思つて、

「さあ、坊ちゃん、おんぶなさい。いいきれいなうちわを買つて

きましよう……。」「といいました。

彼女^{かのじよ}は、探^{さが}したら、これと同じ絵^{おなえ}の描^かいてあるうちわを見^みつけ
ないものでもない。それでなければ、もつと美^{うつく}しい女^{おんな}の人の描^か
いてあるうちわがあるだろうと思^{おも}ったからです。

正^{しょう}ちゃん^なは、すぐには、おんぶしませんでした^{かあ}が、お母^{かあ}ちゃん
の描^かいてある、いいうちわを買^かってきましようといったので、泣^な
く泣^なく女^{じよ}中^{ちゆう}の肩^{かた}につかまりました。

彼女^{かのじよ}は、正^{しょう}ちゃんをおぶって、町^{まち}の中^{なか}をぶらぶら歩^{ある}きました。
「どこへいったら、うちわがあるだろう……。」「

もはや、季節^{きせつ}が過^すぎてしまったので、荒^{あら}物^{もの}屋^やや、絵^え双^{そう}紙^し屋^やの
ようなところを聞^きいて歩^{ある}いてみたけれど、うちわを並^{なら}べている家^{うち}

はありませんでした。

女 じょちゆう 中は、ほんとうに困こまつてしまいました。

「いま、きつと、どこかにありますよ。」といって、彼女かのじょは正しょうちゃんをおぶつて、なおもうちわを探さがして歩あるいたのです。けれど、うちわはなかなか見みつかりませんでした。たまたま売うれ残のこりのうちわがあつても、それは、前まえの正しょうちゃんの大だい好すきなうちわとは似につきもしないもので、正しょうちゃんは、それを手てに取とると、だまつて捨すててしまいました。

女 じょちゆう 中は、それから、まだどんなに探さがして歩あるいたことでしう。

「お母かあちゃんない、……お母かあちゃんない？」と、脊せ中なかで正しょうちゃん

はいしました。

「いくら探^{さが}しても、どこにも、あれと同じ^{おな}うちわはありませんよ。」と、彼女^{かのじよ}は、答^{こた}えました。

まだ、三つの正^{しょう}ちゃんにも、その意味^{いみ}がわかったものとみえて、正^{しょう}ちゃんは、女^{じよちゆう}中の脊^{せなか}中で大^{おお}あばれをしました。

「お母^{かあ}ちゃん、……お母^{かあ}ちゃん……。――」といつて、泣^なきました。

女^{じよちゆう}中は、しみじみと、これほどまでに坊^{ぼっ}ちゃん^{かあ}が、ほんとうのお母^{おも}さんのごとく思^{おも}っているものを、自分^{じぶん}が粗^{そまつ}末^{まつ}にしたことは、まちがっていたと、心^{こころ}から悪^{わる}かったと思^{おも}いました。そして、どんなにしても、あれと同じ^{おな}ようなうちわを探^{さが}さなければならぬと思^{おも}いました。

哀^{あわ}れな彼^{かのじよ}女^なは、町^{まち}の中^{なか}を歩^{ある}いて、歩^{ある}いてまわったのです。と
うとう足^{あし}は、疲^{つか}れました。

そのうちに、日^ひはまったく暮^くれてしまった。そして、秋^{あき}の夜^よら
しく、淡^{うす}いもやが、一面^{めん}に町^{まち}の屋^や根^ねにかかりました。いま、彼^{かのじ}
女^よは、正^{しょう}ちゃんをおぶって、寂^{さび}しい道^{みち}を歩^{ある}いていました。

「坊^{ぼっ}ちゃん、わたしが悪^{わる}かったのですから、どうか堪^{かん}忍^{にん}してく
ださいね。」と、彼^{かのじよ}女^なはいいました。

子^こ供^{ども}は、それがわかったように、おとなしくしていた。そのと
き、ちようど、まんまるな月^{つき}が、林^{はやし}の上^{うへ}へ上^{のぼ}ったのであります。

「おお、いいお月^{つき}さまだこと。坊^{ぼっ}ちゃんのお母^{かあ}さんは、あの中^{なか}に、
おいでなさるのですよ。」と、彼^{かのじよ}女^なは月^{つき}を指^{ゆび}さしながらいいま

した。正ちゃんしょうは、じつと、月つきを水すい晶しょうのような清きよらかな目めでながめていましたが、それらしいなにかが映うつつたのか、
「お母かあちゃん、……お母かあちゃん。」と、自分じぶんも月つきを指ゆびさして、にっこりしました。——これは、正ちゃんしょうが、はじめて、この世よの中なかの哀あわれを解かいしたときであつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷

底本の親本：「未明童話集3」丸善

1928（昭和3）年7月6日

初出：「赤い鳥 第十九卷第六號」

1927（昭和2）年12月1日

※表題は底本では、「遠方《えんぽう》の母《はは》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：くろべえ

2019年11月24日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

遠方の母

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>